

メトロポリタン史学会 第4回秋のシンポジウム

「歴史は誰のものなのか？」

歴史は、しばしば、国民の歴史、民族の歴史として語られ、時に文明の歴史としても語られる。そのいずれの場合にも、さまざまな過去がみずからのものとして^{アプロプリエート}領有され、国民や民族や文明の共有財産に祭り上げられる。高句麗好太王碑は中国史の一齣を物語っているのか、それとも朝鮮史の輝かしい記念碑なのか。中韓両国の間の対立は容易に解けそうにもない。優れた歴史的文化財もまた、何者かによる領有を免れ得ない。ミロのヴィーナスがルーブル博物館を飾っているのは、古典古代ギリシヤ文明が西欧文明の源流だからなのか。もしそう主張されるとしたら、同じ博物館にあるハンムラビ法典を刻んだ石はどういうことになるのか。

今日なお、歴史と過去の領有あるいは帰属をめぐる問題は次々と発生している。本シンポジウムでは、それらの問題をできるだけ広く取り上げて、「歴史は誰のものなのか？」という問いそのものに含まれる思想的意味合いを考え直してみたい。

日時：2008年11月30日(日) 10:00 - 18:00

場所：首都大学東京（東京都立大学）本部棟大会議室

報告

小野 昭（首都大学東京）「考古遺産にみる帰属問題：私の経験から」

北條芳隆（東海大学）「時間と空間および歴史の所有をめぐる両極性
- 沖縄・大和・北海道の対比から - 」

古畑 徹（金沢大学）「歴史の争奪 - 中韓高句麗歴史論争を例に - 」

新井政美（東京外国語大学）「トルコ革命史は誰のものか」

桜井万里子（東京大学名誉教授）「古代ギリシアの遺産の継承について
- 『ブラック・アテナ』の余波のなかで考える - 」

西山暁義（共立女子大学）「国境地域の『記憶の場』 - アルザス・ロレーヌ・ザールラントの事例から - 」